

## 『資本論』第1巻第23章

## 第2節「蓄積とそれに伴う集積との進行中における可変資本部分の相対的減少」

## ▼内容要約

1) 蓄積による生産性の上昇と構成の変化

蓄積の進行中の生産性の上昇が蓄積の巨大な槓杆となる

労働の社会的生産度...「一人の労働者が与えられた時間に労働力の同じ緊張度で生産物に転化させる生産手段の相対的な量的規模」(650)

生産性の増加は、動かされる生産手段の量に対する労働量の減少にあらわれる

・資本の技術的構成の変化は資本の価値構成も変化させる

⇒資本価値の不変資本部分を増加させ可変資本部分を減少させる

「資本価値の構成の変化は、

資本の素材的諸成分の構成の変動をただ近似的に示すだけである」(651)

充用される生産手段の絶対的価値は増大しても、その生産手段自体の価値が低下するため、個別資本家における不変資本と可変資本の差の増大は、それが転換される生産手段の量と労働力の量の差の増大よりもずっと小さくなる

・可変資本の相対的割合は減少してもその絶対量は増えうる

・蓄積が進行すると、労働需要を増加させるためにその増加以上の蓄積が必要になる

労働の社会的生産力の発展は大規模な協業を前提とする

・商品生産の基礎では、大規模な生産は資本主義的形態においてのみ担われることができる

\*個別資本家によるある程度の蓄積(「本源的蓄積」)がこのような資本主義的生産の前提となる  
「個々の資本家の手もとにおける」

生産力を増大させる方法＝剰余価値を増大させる方法＝資本による資本の生産方法＝資本の加速的蓄積の方法(653)

資本の蓄積と独自の資本主義的生産様式が刺激しあって資本の技術的構成の変化が生まれる

2) 資本の集積

個別的資本は生産手段の大なり小なりの集積であり、その大小に応じて労働者の指揮権をもつ資本家は増加した富の集積を拡大して、大規模生産と資本主義的生産方法の基礎を拡大する

・同時に、元の資本から若枝がわかれて、新しい独立な資本として機能する

資本による生産手段の集積の特徴

① 個別資本家の手もとでの社会的生産手段の集積は社会的富の増大に制限される

② 特定の部門の生産手段はその部門の資本家たちに配分されており、かれらは互いに競争する

「それゆえ、蓄積は、一方では生産手段と労働指揮との集積の増大として現れるが、他方では多数の個別資本の相互の反発として現れるのである」(654)

### 3) 資本の集中

社会的総資本の個別への分裂・反発に対し、諸部分の「吸収(集中)」が反対の作用をもつ

「それは、すでに形成されている諸資本の集積であり、それらの個別的独立の解消であり、資本家による資本家からの収奪であり、少数のより大きな資本へのより小さい資本の転化である」(654)

集中の過程は社会的富の絶対的な増加または蓄積の絶対的限界に制限されていない

\*このことが集中と「拡大された規模での再生産の別の表現でしかない集積」(655)を区別する集中の極限...その部門のすべての資本が単一の資本に融合した場合

社会的総資本が単一の資本家なり単一の資本家会社なりの手に合一された場合

諸資本の集中に関する事実

- ・競争の強さ(価格の安さ)は資本規模に依存するため、大きい資本が小さい資本を打ち倒す
- ・資本主義的生産様式の発展につれて、事業に必要な個別資本の最少量も大きくなる
- ・小資本家たちが大工業がまだ完全に征服していない部面に押し寄せ、激しい競争になる
- ・信用制度が形成されて、諸資本集中のための一つの巨大な社会的機構に転化する

「資本主義的生産と資本主義的蓄積が発展するにつれて、それと同じ度合いで競争と信用とが、この二つの最も強力な集中の槓杆が、発展する。それと並んで、蓄積の進展は集中される素材すなわち個別資本を増加させ、他方、資本主義的生産の拡大は、一方では社会的欲望をつくり出し、他方では過去の資本集中がなければ実現されないような巨大な産業企業の技術的な手段をつくりだす」(655) *文章について、極限とa以内*

また、集中は蓄積の機能(生産手段の規模の拡大)を補う

集中も集積も結果は同じだが、集中はより蓄積の作用を強めかつ技術的構成の変革を促進する

### 4) 技術の改良による可変資本部分の相対的減少

追加資本や更新資本は産業上の諸改良を利用するための媒体として役立つ

⇒改良による生産性の向上は労働需要の減少を引き起こす

蓄積による追加資本...固定資本の増加に比べてわずかな労働者しか引き寄せない

再生産される古い資本...それまで利用してきた多くの労働者をはじき出す

▼疑問点・論点

・先週からの論点「賃金と賃金率の区別」について

・「元の資本から若枝が分かれて、新しい独立な資本として機能する」(653)

本節での資本の分裂・反発とは、機構化のような現象を指しているか。

・本節での集積と集中の関係はどうなっているか。また、諸資本の集中という蓄積の作用は原論ではどのように扱われているか。